

## 第27回 イモリ



イモリ、標準和名はアカハライモリといい、体の腹側に鮮やかな赤と黒のコントラストのまだら模様が印象的な動物です。両生類の仲間で、卵は水中に産卵され、孵化した幼生はしばらく水の中で過ごします。変態して陸に上がり何年かを陸上で過ごしたあと、成熟して産卵場に戻ると再び水の中で生活するようになります。背中側と対照的な腹の目立つ模様は、敵を威嚇したり、皮膚に毒をもっていることを知らせる効果があると考えられています。どこにでもいるとっていい身近な小動物でしたが、全国規模での減少が確認されており、ついに環境省のレッドリストで準絶滅危惧種に指定されてしまいました。河北潟周辺の水田にも、かつてはアカハライモリが生息しており、生息しているのが当たり前のことと思っていたのですが、記憶をたどってみると、最後にアカハライモリを見たのは、かなり以前だったことに気がつきました。そこで河北潟の生物をよく知る方に、「最近河北潟の周辺でアカハライモリを見ましたか」と訪ねてみたところ、誰からも「見ていない」という返事でした。ところが、河北潟の周辺の集落で生まれた年配の方々に聞いてみると、「あそこにもいた、ここにもいた」「漁の時に一緒に捕れた」などと、腹の模様とともに鮮明な記憶として残っていることが分かりました。

かつては河北潟の生物として普通に見られたアカハライモリは、いつの間にかこの地域からは姿を消してしまったようです。河北潟地域におけるアカハライモリの生息場所は水田やその周辺の土水路、河北潟に流れ込む河川の河口付近にできる湿地などでした。多くの水辺が

改修されてコンクリートの護岸となったり、ベンチフリュームの水路に変わったりしたことで、成体が普段潜むことのできる水域が無くなってきたこと、田んぼの畦の除草剤散布が徹底されるようになって水辺に隣接した草がなくなり、成熟するまでの若い個体が生息できる環境が減少したこと、乾田化により水たまりなどの越冬場所が少なくなったことが、消失の原因として考えられます。河北潟の周辺の里山にはまだ残っているはずですから、河北潟の周辺の農地などでイモリが棲めるような環境が再生されれば、再び戻ってくる可能性も考えられます。しかし、里山でも生きものが減ってきている現状があり、できるだけ早く、河北潟でさまざまな生物が生きることができる自然再生が進むことが望まれます。(文 高橋 久)